

C—13 農村における生活改善運動の問題点

東京家政大 中村 卓

1. 家政学は生活に直結した応用科学であり、生活の向上を目的としたものであり、計画生活の科学である。だが生活の向上という意味はなんであるのか。合理的衣食住生活の推進に大きな役割を果たす家政学は、既成諸科学の単純な応用だけであってよいのか。食生活改善運動推進の目的は保健衛生学的・調理学的視点からだけで十分であるのか。こういった問題意識をもつことが生活改善運動を確実な基礎の上にのせるものであるし、家政学が「生活」を歴史的・社会経済的場の中に再整理する

ことにもなるであろう。

2. 合理化を実際に主体的に推進した農民階層が何かを検べれば、「生活の合理化」の意味が判明するであろう。結果だけを云えば、それは中農層という進歩的階層だということである。この階層は農業生産力の代表的担い手であり、「生活」は生産と未分離であるとはいえ、生活合理化を推進している。ここから生活合理化の真の目的意識が判明する。

3. 都会生活と同様に農村生活に家政学研究成果を応用することは危険であることを知る。小麦生産の皆無の農村地帯に粉食形態を導入することはできない。場合によっては非合理生活がむしろ合理的なものになる。結局農業生産力の進転が家庭生活の合理化を必然化するということになる。